

『歌集エルニーニョ』からたどる速水頌一郎先生の思い出

鳥羽良明 (1955 年卒、東北大学名誉教授)

1. はじめに

2 月の地球物理の同窓会で、私の短歌の話とともに昔の恩師の思い出を語るべく依頼を受けていた。ちょうど地球化学関係の角皆静男北大名誉教授がその 2 月に全国日本学士会のアカデミア賞を受賞し、同会からその講演内容が載る会誌“ACADEMIA”2 月号の埋草に数頁の執筆依頼を受けた。依頼原稿と同窓会の講演準備の時期が重なり、またこの 2 月に傘寿を迎えたこともあって、その原稿とこの講演準備を並行させた次第である。

出席者には同会誌“ACADEMIA”126 号(2011 年 2 月号)の私の部分の別刷「研究と教育のわが心のアルバム—『歌集エルニーニョ』を引きつつ」を配布し、別刷の前半にある京大の恩師速水頌一郎先生の思い出の部分を中心に、Power-point の画面で関連した短歌を紹介し、先生方の講義中の写真などもお見せした。もともと短歌の話というご要望があったので、この別刷にはなかったが、私の短歌の師であった扇畑忠雄先生(東北大名誉教授)のことや、上記歌集にある歌論の中の「地球物理現象の歌」に書いた、土屋文明の中国旅行の歌なども少し紹介した。講演時間の関係で、別刷内容の多くを省略したが、本稿にはほぼ話した内容を記した。

2. 私と短歌

私は 1982 年に東北アララギ会「群山」主宰の扇畑忠雄先生の門に入って作歌を続け、2008 年に、それまでの 25 年間に「群山」に発表した 1600 余首から 961 (31²) 首を自撰して『歌集エルニーニョ』を上梓した。そのあとがきに、「この歌集は私にとって、真理の探究と後進の育成に力の限り励んだ半生の心のアルバムである」と書いた。歌集には、昔のことを回想した歌も多く含まれてをり、また東北学院大学英文学の福地明子教授がご好意で、歌の 31 首を英語の詩に訳してくださった「英訳短歌エルニーニョ抄」、および地球の現象に関わる自然科学者としての私の「歌論三題」を収めている。

扇畑先生について少し紹介すると、1935 年 京大文学部卒の万葉学者で、京都府立第一高等女学校教諭、旧制第二高等学校教授を経て、東北大学教養部教授、教養部長、そして名誉教授となられた方であった。短歌はアララギの土屋文明の流れで、戦後東北アララギ会「群山」を創刊され、宮中歌会始の召人もつとめられ、2005 年に 94 歳で逝去された。代表的な歌から一首を引用すると、

老いてなほ美しきものを吾は見む若かりし日に見えざりしもの

この「美しきもの」には、われわれにとっての科学的真理も含まれていると考える。

土屋文明について少し触れると、上記「歌論三題」の中には「写真短歌と自然科学」や、「地球物理現象の歌——『葦菴集』について」がある。『葦菴集(かいせいしゅう)』は土屋文明の歌集の一つで、黄河の辺りを旅行された歌が多い。少し引用すると、

西南托克托(たくと)の方に黄河ありと涯なくた靡(なび)く夕べの光

文明の一行は厚和から、黄河の最も北にある包頭に向かった。乾燥地帯を旅し続けた後、まだ見えないが大黄河がもうすぐ先にある。その心のときめきがこの一首に表れている。

今見るは勢減りかけし水嵩にて西藏(チベット)雪水の終りなりといふ

七月に雪水到り甘肅の雨水は到る九月なかばごろ

黄河には、年に 2 回水位あるいは流量のピークがある。速水先生の黄河の流量の変化の研究によると、包頭では 7 月と 9 月とにピークがある。そしてそれは、遙か上流チベット高原の 4、5 月ごろの雪解けの水と、甘肅省の梅雨による出水とが、それぞれこのころここに到達する。文明は現地の人からそういう話を聞いて、大陸の広大な自然のスケールに感動したものと思われる。

3. 学ぶ心の始まり

私は父の勤めの関係で、物心ついたころ、大阪の四天王寺に程近い家に住んでいた。裏側はJR環状線の桃谷駅の南西側にあったかなり広い原っぱに面していて、その向こうに生駒山を遠く見渡せるところであった。

生駒山昇る朝日に障子照るものごころつきし頃の思ひ出

縁側の内側の障子のある部屋に寝起きしていたが、朝目が覚めると、雨戸の節穴から差し込んで障子に当たる光の点が、次第に左下に移動するのを見ながら、寝巻きを着替えた。雨戸を開けると、生駒山から出た朝日が、右上に向かって昇って行く。

生駒山より昇る朝日を不思議なるものと思ひき幼き吾は

表の電車通りの向かいには当時大阪商大予科で、グラウンドの奥に校舎があり、夕方には、縁にリングがあるように見える赤い太陽が少しずつ屋根に隠れて沈んで行った。

わが生(あ)れし家の真向ふ商大予科の校舎に沈む日を忘れえず

近くに生魂(いくだま)神社や四天王寺など、よく連れて行かれた社寺があったが、電車通りを見下ろす家の2階の窓で、7歳年上の姉を相手に、「神さまとは見えない人なのだろうか、その辺を歩いている人々の中にまぎれているものだろうか」と、疑問を投げかけたのを覚えている。

神とは透明なる人か人混みにまぎれて歩くものかと迷ひき

哲学的思考の芽生えであった。

ふるさとの山を偲ぶにおのづから甦る記憶五つまた六つ

ふるさとの山と呼びたき幾つあり就中生駒山書写山吉田山

ここで書写山は、学制改革で新制に切り替わる前年に入った旧制姫路高等学校の裏山であり、吉田山は京大吉田キャンパスの東方の山である。

小学1年の時、大阪四ツ橋の市立電気科学館に、プラネタリウムの東洋での第1号機が入り、それがきっかけで、4年の頃からは天文少年となっていた。

「天文月報」作りて学級に配りつつ心気負ひし少年なりき

4. 京大の恩師速水頌一郎先生の思い出

小学5年の冬太平洋戦争に入り、引っ越ししたり転校したりしながら、本籍地の旧制兵庫県立赤穂中学校で戦後を迎えた。このような混乱のため、天文への興味はどこかへ行ってしまい、旧制姫高は文科に入学したが、1年修了で学制改革となり、新制大学最初の年(1949年)に京都大学法学部に入学した。父が法科だったことの影響であった。

しかし、私はもともと宇宙や地球の自然現象、人類の起源など、この世界の本質を理解したいといった欲求が強かったので、教養課程でいろいろな講義を聴いている間に、講義を聞いた何人かの先生に相談して、理学部に転学部することを決意した。

4.1 最初の講義

研究と教育を主たる任務とする大学の教官として大切な一面は、学生に感化を及ぼし、優れた人材を輩出させることにあると思う。教養課程で私が最も影響を受けたのが、「自然科学A1」という4単位の物理系自然科学の通論的な講義(同A2は生物系)で、その地球物理学の部分は当時助教授であった速水先生が担当された。その講義の最初は、「自然科学というものを振り返って考えて見ます」という言葉で始まり、万人共通のものだけを積み上げてきた自然科学を根源から説き起こされるものであった。夏目漱石の『文学論』の中から、Wordsworthの『スマイレ』の詩とencyclopediaの“viola”の項を対比して、文学と科学の違いを説かれた。そのところを思い出してみると、漱石の『文学論』(岩波書店、pp.264-265)

には、

「今試みに堇草につきて言えば、字典に曰く、

“*Viola.* A large genus of usually small plants of the violet family, having alternate leaves and axillary peduncles bearing 1 or 2 irregular flowers, the lower petal being prolonged into a spur or sac.”

これ明らかに活動を欠損せる文字なり。転じて Wordsworth の詩句を見るに、

“A violet by a mossy stone

Half-hidden from the eye!

—Fair as a star, when only one

Is shining in the sky.” —*She dwelt among the untrodden ways.*

堇の風貌の躍如として活動するを見るべし。」

とある。それをご説明くださったと思う。

わが一生(ひとよ)究めゆく道さだまりき君の講義に心ひかれて
文学論引きて科学を説き給ひきわが受けし君の最初の講義

4.2 創造のよろこび

4月に法学部から理学科に転学部してそれほど日が経たない2回生の夕方、速水先生の研究室を訪ねて、「私は誰もしている遊びということをしていないのですが、それでいいでしょうか」といった質問をした時だったと思う。先生のお話しは次のような内容であった。

「教授たちの部屋へ行くと、みんな書棚に沢山の本を並べている。しかし、それらの本や論文は、すべて創造活動の結果としての、いわば「かす」のようなものだ。価値があるのは、誰も想像していなかった新しい真理を発見したり、新しい考え方を作ったりする、創造活動そのものなのだ。一度創造の喜びを知った者にとっては、それ以外の喜びは赤ん坊の喜びのようなものだ。あなたも早く創造の喜びを知る人になってほしい。」

日が暮れて雨が降り出し、先生のお宅と私の下宿とが同じ方向だったので、京大裏門を出て今出川通りを雨に濡れながら、銀閣寺道まで並んで歩いて帰った。創造の喜びを説かれたこの日のお話しが私の一生を支配したと言っても過言ではないと思う。

「創造の喜びを知る人になれ」生涯残る恩師の言葉

創造の喜びを説く君に副ひ濡れて帰りき夜の銀閣寺道

また何時か、「モーツァルトがパンのために多くの作曲ができたように、若い研究者も必要に迫られてする研究もしながら、その人その人の心の底から湧き上って来る、捨てることのできないものを一生かけて育てていく、そういうのが本当の学問で、学問において最も尊重すべきもの、人間として最も尊いものである」と言われたのを記憶している。

4.3 休学中に頂いた手紙

3回生で地球物理学科に所属したが、少し転学部の無理がたたって病気になり、休学する羽目になった。郷里の赤穂で休学中の私に頂いた速水先生の手紙が今も残っている。およそ 400 字、普通の便箋3枚に書かれた手紙には、見舞いの言葉のほかに、次のような文があった。

「学生生活だけが人生であるわけでもなく、種々の環境に身を処することによって未知の世界を理解し、人間的生活内容を豊富にすることができるのだらうと思います。」

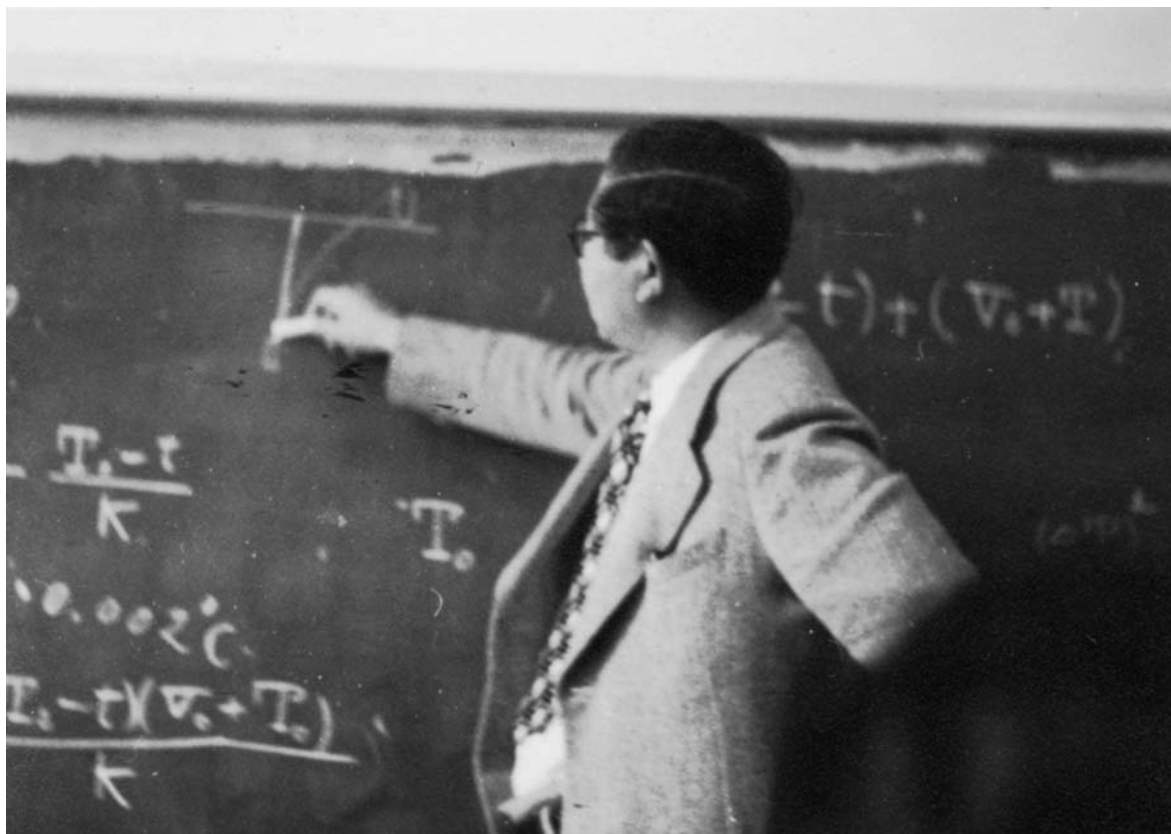
「生きるということは矛盾を含むものであり、生々発展の世界を論理的に完結した閉鎖系によって表現することはできません。貴君がこの得がたい静養の期間において、生命の神秘を感得せられ、自己

創造の光明を胸裏にともされることを期待いたします。」

「自然科学の真理でさえも、その多くは大学の研究室において発見されたものではありません。自己の存在するところがすなわち研究の場であります。お元氣な姿を教室においてみられる日の近からん事をお祈り申し上げます。」

休学の吾に賜ひし恩師の手紙右上がり文字の便箋三枚

私はやがて復学し、4回生で迷うことなく海洋物理学の速水先生の研究室に分属し、その後永くご指導を仰ぐこととなった。仕合せなことにそれがそのまま職業となって、大気と海洋の相互作用、特に風波など、海面境界過程にかかわる現象の解明の研究と教育に身を捧げ、非常に恵まれた人生だったと思う。速水先生の講義中の写真をここに載せた。



写真：講義中の速水頌一郎先生。撮影は1954年、鳥羽良明。

4.4 京大北門丁字路の思い出

速水先生についての思い出のひとつは、教室が吉田の本部構内から北部構内に移転した頃だったと思うが、その両方の間を行き来していた時、本部構内に北門を入れて数10mの丁字路付近で、二、三度先生とすれ違ったことがあった。その後研究室で先生から、「君は目にもとまらぬ速さで歩いているね」と言われた。それはただ速く歩くという意味だけと捉えていたのが、それから50年経って、京大工学研究科のCOE研究員として北門のあたりを毎週通っていたとき、あることに気付いた。そのときの歌である。

この道をわが歩むたび思ひ出づこの丁字路の若き日のこと
君は目にも止まらぬ速さで歩いてゐるね五十年前の恩師の言葉
ひた向きなる学生と吾を見給ひしものと悟りぬ五十年経て

5. 東北大学への赴任、研究・教育の日々、国際会議・出張など

1963 年秋から 1 年半、Horace Byers 教授の招聘で、Chicago 大学に Research Associate として滞在した。滞在中は、雑用がなかったので研究に専念でき、その日の朝と夕方とで変革された自分を実感するような日々が続いた。論文を 3 つ Tellus に発表して帰国して、助教授にいただいたが、1971 年に、東北大学に新設された海洋物理学講座を担当すべく招かれて、仙台に赴任した。その後の研究と教育の日々の歌を少し紹介する。

青葉山に新築成りし教室の講義の窓にほととぎす啼く
わが通ふ研究室への丘のみち楓(つき)の黄葉(もみち)のつばらかに照る
単位には関りなしと始めたるセミナーを院生ら続けよと乞ふ
入試の会議深夜に終へて立ち寄りし研究室に院生らなほ励みをり

そういう院生達が多かったので、就職にはあまり苦勞をしなくて済んだ。現代の社会情勢ならばそうはいかないと思う。そのあたりについて近年の 2007 年の歌に、

博士得てもポストクのみの学術行政これで日本の未来はあるのか

研究室からは、私の後任の一人で理学研究科長、日本海洋学会長も勤めた花輪公雄教授、博士課程修了で気象庁に入った羽鳥光彦長官（現在）などなど、数多くの研究・教育者、現業官庁の幹部が輩出した。私はよく「みんなが勝手に偉くなった」と言っているが、私としては幸せなことである。

大学の教官は学会や科学行政にかかわる諸会議等で、国内外に出かけることが多い。かつてユネスコ政府間海洋学委員会(IOC)の下に「気候変動と海洋に関する委員会(CCCO)」と呼ばれるものがあって、私は 8 年ほどその委員をしていて、1 年おきにパリのユネスコ、その間の年はいろいろな国で、その会議が開かれた。それらを含む外国出張の時の歌の例を少し紹介する。

三日間の学会に遠く来たりけり北極越えてこの荒海の辺に (Golway 大学)
はてしなき牧場に立てる白壁を横より照らす八時の夕日
送られし書類の数々読みあへず重き鞆持ちイギリスへ発つ (Abingdon)
疲れしるき身をはげまして夜の宿に明日語るべき原稿作る
シンポジウム主催を終へて旅ゆくに高き機中に脳貧血となる (Bedford 海洋研究所)
冬早きノバスコシアの海風ぎて岩くろぐろと潮に濡れある
遠近(をちこち)に鐘楼ありて時の鐘運河(カナル)にビルにこだましひびく (Venice)

上記 IOC そのものにも、日本国政府代表として数日の会議に出席した時、

太陽を追ひて地球を回りゆくパリに到りてつひに日暮れず (Paris)
国の名を呼ばれて語るわが英語多国語通訳を意識しながら
イヤホーンに耳痛みつつ会議場に同時通訳の声聞きつつ
葉ごもりにプラタナス青き実を垂れて今朝は晴れたりユネスコの道
黒きまで澄み渡りたるシドニーの空を逆向きに日の伝ひゆく (Sydney 大学)
ユーカリの茂り永久(とは)なる学び舎に今日始めての講義終へたり
紺碧の空にひと木を黄に染めてこぼれつつ咲くワトルの花は
君と吾三十余年前の同級生いま共に南へ研究航海 (白鳳丸で浅井富雄教授と)

『歌集エルニーニョ』の歌集名の元となったのはエルニーニョ現象で、

南米の沖に高温の兆しあり学生らエルニーニョの調査に向かふ
赤道の海にエルニーニョつづきゐる日本の冬を寒からしめず

6. 定年退官とその後の現況

1994年に定年退官を迎えたが、その前後に研究生生活を自ら省みた歌を幾つか記す。

わが一生(ひとよ)修道(しゅどう)の旅とかも言はむ大学勤務も論文執筆も
「ああ修道(しゅどう)の旅衣(たびごろも)」と唄ひし若き日の寮歌の心今に生くべし
生(あ)れてよりつひぞせざりし幾つあり煙草ゴルフ将棋マージャン
無造作に終へむとしたる最後の講義学生らの花束に吾は驚く
花の下に妻と連れ立つ去年よりは些かのゆとりありといふべく

1997年に大きな彗星が地球に近づいた。

星の間をゆく彗星に心遊ぶ永久なるものに逢ひし思ひに
わが生の限りの時も彗星はなほ地球より去りつつあらむ
ヘルボップ彗星戻る四十四世紀人類はなほ生きて在らむか
人類の終焉いかに来るらむ地球環境変動はた科学の暴走

定年後は、JAMSTEC、現在の JAXA の地球観測研究センター、岩手県環境保健研究センターその他から請われて、非常勤で赴いていたが、それらが終わり、2005 年から京大工学研究科流体理工学の森悟教授に誘われて京大 COE 研究員となった機会に、助教時代にあった京都左京区岩倉の古巣に落ちついた。

若き日の自我蘇る進々堂の木の長椅子にランチ食ひつつ
わが自我を育てし京都と伸ばしたる仙台とふたつ吾の故郷
過ぎ来しを省みて思ふわが適(かな)ふ業は研究教育のみと
研究を止めざる訳に気付きたり未知なるものがそこにあるから
この山も空も家並(やなみ)も行く人も吾と同根観じつつ歩む

まだ学生の頃だったと思うが、速水先生が私に、「宇宙もあなたも私も、みんな同じ根から生えている。その根の事を、神と言ったり無と言ったりなど、人によっていろいろな呼び方をするが、私はそれを愛と呼びたい」といったことを言われたのを覚えている。上の「同根」の歌は、作った時には意識しなかったが、この速水先生のお話しが心のどこかにあったのではないかと後で気付いた。

宵々にピアノ数分弾きて寝る心休めむバッハのプレリュード
バス降りて家路につけば叡山の肩にかかれる十六夜の月

ここに引用した歌はごくわずかであるが、この機会に恩師速水頌一郎先生の事と、研究・教育にかかわるわが思いを振り返ることができて幸いであった。

文献

1. 鳥羽良明：『歌集エルニーニョ』短歌新聞社刊、2008 年、308 頁。
2. 鳥羽良明：研究と教育のわが心のアルバム——『歌集エルニーニョ』を引きつつ。
全国日本学士会会誌 “ACADEMIA” 126 号、30-37 頁。2011 年 2 月。
3. 夏目漱石：漱石全集第 16 卷『文学論』。岩波書店、1949 年。
4. 鳥羽良明：京大海洋物理学分野の歴史展望 — 講座の始まり、野満・速水・国司・今里教授の時代から現在への発展 —。京大地球物理学研究の百年 (II)、19-24、2010 年。